



文・写真 = 山口 由美 (旅行作家)  
text and photos by Yamaguchi Yumi

photo by Imamura Kenshiro

# 「ゼロから新しい仕事を 見つけていくことに喜びがある」

パプアニューギニアで自動車整備技術の指導に携わるシニア海外ボランティア、稲見廣政さんは、短大を卒業後、人生の大半を JICA のボランティア、そしてアフリカとともに歩んできた。

## 自分の技術を 海外で生かしたい

稲見廣政さんは、黎明期の青年海外協力隊（当時の日本青年海外協力隊）が生んだ豪傑の一人に違いない。

などと、面と向かって言ったら、きっと稲見さんは、恥ずかしそうにきまじめな表情をして否定するのだろう。

確かに豪傑という表現は、稲見さんには似合わない。確かな職人芸に裏付けられた腕を頼りに、まるで技術立国として君臨してきた日本そのものであったかのような生き様は、「美しい日本人」とでも言うべきなのかもしれない。だが、アフリカの、特に最初の赴任先であったタンザニアの話には、やはり豪傑という表現が重なってしまう。

1970年代初め、稲見さんが専門とする自動車整備はひとつの転換期を迎えていた。元来手先が器用で、中学時代には大工の棟梁がぜひ弟子にと懇願してきたほど。自動車を選んだのは、これからは、木よりも金属の時代と思ったからだという。そんな彼にとって、壊れたら部



タイヤを留めるネジもただ強く締めるのではなく、その加減が大事なのだと言っている稲見さんは語る

品ごと交換する時代の到来は、職人芸が生かせる仕事としての魅力を失わせるものだった。しかし、海外ならば自分の技術が必要とされる仕事があるに違いない。まず考えたのは、アメリカやカナダなどの先進国で技術を生かす道だった。そんな

時、たまたま図書館で手に取ったのが協力隊の情報誌『若い力』だったのである。「今も覚えています。強い衝撃、感動を受けて身震いしたことを。日本の青年たちが開発途上国に向き、現地の人たちと一緒に汗を流し、共に学び何が

を生み、喜びを分かち合う。何と素晴らしいことがこの地球上で行われているのかと。特にアフリカでの活動に強い関心、興味を抱きました」

こうして稲見さんの人生は、未知の世界へと大きく舵を切られることになる。

72年12月、赴任したタンザニアは夏真っ盛りだった。最初の任地は、モヨロシ・ゲーム・リザーブという野生動物保護区である。

## タンザニアでの 青春時代

ブルンジの国境近く、タンガニカ湖のほど近く、地図に地名を見つけたことさえできないような場所だ。電気もない、水道もない、近くに店もない、ただ目の前には圧倒的な大自然と野生動物の群れがあった。

「夜になると、内臓に響き渡るように不気味なライオンやヒョウの声、テントの周りをドシドシと走り回るカバの足音が聞こえてくるんです。最初のころは、自分は生きて帰れるのだろうかと思いましたが、家なんかいない、テントで暮ら



Inami Hiromasa  
シニア海外ボランティア  
**稲見 廣政**

挑戦者たち  
Stories of  
Challengers  
Vol.09



「マイクロメーター」で紙の厚さを測る

### 小数点以下の数字の大切さ

稲見さんが、自動車整備を志す学生たちに必ず最初に教えることがある。それは、小数点以下の数字の大切さだ。

途上国の学生たちは、国を問わずこうした精密な数字の概念に慣れていないという。大きな数字は、お金や面積など、実際の生活で接することがあるが、小数点以下の数字に触れる機会は少ないからだ。

しかし、自動車にとって、例えば1ミリのすき間は、とてつもなく大きなもの。0.01ミリと1ミリの差の大きさを知り、小数点以下の数字に慣れることが、あらゆる精密さの基本となる。そして、それは、自動車整備だけでなく、あらゆる分野におけるエンジニアとしての基本でもある。

授業では「マイクロメーター」や「ノギス」といった器具を用いて、紙の厚さを測らせてみる。0.01ミリといった数字を実感として初めて知る。そこからエンジニアの卵の第一歩が始まるのである。

自分の能力が生かせるのならば、どんな仕事だって構わない



寿司職人のユニフォームを着て料理をする稲見さん

は95年のことだ。任地となったのはongoongo自然保護区。そこを拠点として、かつてと同じように無線で入るイナミ・コールに伝えて各地を回った。お迎えのセスナが飛んでくることもしばしばだったという。

「寿司を初めて食べたのは20歳の時でしたが、こんなにうまいものがあつたのかと感動したんです。以来、いつか寿司を賞えたいという夢がありましてね」

日本で家族と落ち着きたいという気持ちもあつたのかもしれない。やがて奥さんの故郷である鹿児島で寿司職人として働き始めた。

しかし、働いていた店の事情などもあつて、運命は、再び稲見さんを途上国へと誘つた。2003年、自動車整備のシニア海外ボランティアとしてボツワナへ。そして、05年10月からはパプアニューギニアで活動している。

ゴロカ大学の技術職業教育科で自動車整備の基礎を教えるのが稲見さんの仕事だ。高原地帯に位置するゴロカは、まぶしい日差しがどこかアフリカに似ているようでいて、しかし、アフリカとは異なる風景がある。「アフリカではものを買うとき、何でも交渉するのに、マーケットでもの値段がちゃんと表示されているのは驚きましたね」赴任して間もないが、その人

柄と料理の腕に引かれて、稲見さんの家には同僚のシニア海外ボランティアや協力隊員たちが集つた。「夢はいつかタンザニアに帰ること」だという稲見さんだが、今はすっかりパプアニューギニアの生活になじんでいる。そして、ここにもまたエンジニアとしての稲見さんの腕に真剣なまなざしを向ける若い人たちがいる。いつかパプアニューギニアにもイナミの名前が知れ渡り、アフリカでそつてあつたように、教え子たちが各地で活躍する日がやがて来るに違いない。



ゴロカ大学での授業風景。今日は研究発表の日だ。パプアニューギニアの学生は、とにかく熱心なのが教えていてうれしいという



稲見さんはシニア海外ボランティアとしてボツワナにも赴任し、自動車職業技術短期大学で自動車整備技術を指導した(稲見さん提供)

「その後、タンザニア各地の動物保護区を巡りました。中でも忘れられないのはセルス・ゲーム・リザーブのことです。そこは自動車の台数が多く、整備を外注していたのですが、その調査を頼まれてね。ところが料金に見合った整備とはいえなかった。これは人材を育成しなければと思ひました。そして、保護区の中に自動車整備の学校を建てたのです。タンザニアに来て5年目のことでした」

やがてタンザニアの動物保護区にイナミの名前は広く知れ渡ることになる。毎晩7時になると、全国の動物保護区の間で無線交信をするのだが、稲見さんは各地から来てくれとよくコールされた。どう猛な野生動物に

しながら、食事は毎日、現地の主食であるウガリ(トウモロコシの粉を練ったもの)だけ。あとは、魚を捕ってして食料にするしかない。半端じゃない自給自足だ。「釣りといっても、レジャーではありません。釣れなければ夕食はないのですから必死です。ある日、魚を捕った帰りにはつたりサイに出くわしました。ライフルを車に置いたままだったので、慌てて木の上に登って

やり過ごしたなんてこともありました」まるで漫画のような武勇伝を稲見さんは、淡々と話す。任務はもちろんな自動車整備の技術指導だが、車さえ直していればいいというわけにいかない。同僚たちとともに自らもレンジャーとしてサバンナを疾走する日々だった。



ボツワナの自動車職業技術短期大学にて。学生たちと自動車整備の実習を行う稲見さん(稲見さん提供)

おびえていた青年は、いつしかアフリカの大地に必要とされる存在になっていた。「よく任地に自分の仕事がないという人がいるけれど、自分の能力が生かせるのならば、どんな仕事だって構わないと思ふんです。与えられた仕事よりも、むしろゼロから新しい仕事を見つけていくことに喜びがあるのではないのでしょうか。タンザニアには9年間いましたが、エアーストリップ(簡易空港)、道路、橋、建物、自分の持っている技術を駆使してあらゆるものを手掛けました」

### アフリカからパプアニューギニアへ

81年に帰国。その後、青年海外協力隊訓練所勤務などを経て、85〜88年、89〜95年の2度、協力隊の調整員として再びアフリカのザンビアへ。アフリカとそして協力隊と共に歩む稲見さんの人生は続いた。JICA専門家として、古巣のタンザニアに再び赴任したの

ボランティア調整員。ボランティア要請の背景調査や、ボランティアが所属している機関との交渉、危機管理など、ボランティア活動を支援する。

Inami Hiromasa

いなみ・ひろまさ 1949年青森県出身。72年北海道自動車短期大学卒業。72〜81年タンザニアで青年海外協力隊員およびシニア隊員として自動車整備技術の指導に携わる。その後、青年海外協力隊隊根訓練所勤務、青年海外協力隊ザンビア事務所勤務(調整員)、青年海外協力隊広尾訓練所勤務などを経て、95〜97年JICA専門家としてタンザニアで機械整備を指導。2003〜05年ボツワナでシニア海外ボランティア(自動車整備)、05年からパプアニューギニアへ。